

四十二、去りゆく者の残すもの

私は近頃、大地の上から去ってゆく人の、あまりにあわただしく、相続くのを見るにつけて、ことさらに「去りゆく人の残すもの」ということが、思われてならなくなつた。残すものは何かということとは、今日の、今の生活が何であるかということであるがゆえに、私にせまつてくるのである。

腹の一番底にあるもの、それが一番明らかに、大地の上に残るものである。

腹の底に一物あれば、言葉ではいかにきれいに言つても、きれいな言葉の中に濁りがある。その濁りだけは、不言実行となつて現われる。

仏道を求めつつも、我があれば、ものを言わぬ我がものを言うて、仏道はものを言つてこない。

一ヶ月してわからず、一年して現われざるも、二年をすぎて、心の奥の光るものがある。三年たつて周囲を照らし、去るに至つて彼は大きく、去つて後、いよいよ彼は偉大である。逃げた鰻は大きいとは、彼のことである。多くの人は去つて後大いならず。真実の念仏の子は、必ず尊い。

世尊を如来というがゆえに、また如去という。一如に乗じて来りたもうがゆえに如来であり、一如に乗じて一如の世界に去りたもうがゆえに、如去である。

「十方三世の無量慧 おなじく一如に乗じてぞ 二智円満道平等 摂化随縁不思議なり。」(和讃)

十方三世の無量慧とは、十方三世の諸仏のことである。諸仏は一如に乗じて、自利の智慧も、利他の大悲も円満することができるのであり、これによつて一切衆生を摂化せられるのである。

諸仏菩薩は、弥陀の智慧によつて生死海にあらわれ、自ら度し、また衆生を度したもう。八相成道して、自利成就したもうままが、尊き利他の徳風を人生に残したもうのである。

「鹿を追ふ獵師山を見ず」と世間にいう。凡夫の貪欲は、妄念の鹿を追うて、足元を見ず、それゆえにいかなるものを後に残しておるか、問題にさえせぬ。静かに足跡を凝視して、足跡を問題にするがごときはばかくさいとさえ考える。

三毒煩惱には自覚はない。

凡夫の生涯には、それだけでは何ものの尊きものをも残さぬものではあるが、如来世尊は、その凡夫の上に、唯一絶対の尊きものを廻向して、凡夫下品の生涯をも尊きものとなしたもうのである。

清浄の願往生の尊き一道は、まずわが前に立ちたもう善知識の教えに遇うことによつて開き初めてくるのである。

憶えば、煩惱の醜い歩みにすぎなかつたわれが、浄土真宗、真実の教えに遇うたことは、不可思議中の不可思議である。真実の大法こそは、世尊の残したまいし、不滅の芳香である。梅檀香である。伊蘭林の悪毒臭を転じて、菩提の徳の香たらしめたものものは、ただ真実の教えである。真実の教えを聞信せずしては、人はただ、貪欲中心の生活を出ることはできないであろう。

教えは言々句々、名号の大行より出でたるものである。大行こそは常、楽、我、浄の大涅槃の徳、そのままに、唯一の不滅の功徳大宝海である。無漏の大善そのものである。この大行、大行自らを衆生に廻向顕現して、衆生の生活の本質となり、大道となりたものである。この名号の大行をほかにしては、ついに衆生には、徳も、光も、大善も、真実も、道も、生命も、ないのであつた。

まことに如来の大行こそは、無量寿を体とし、無量光を相とし、撰取不捨を大用とする、久遠の太陽そのものであつた。

如来は久遠の太陽である。

世に太陽ほど不要なるものはあり得ない。如来もまたしかりである。不用の用である。しかるに、世の多くの智者たちは、懐中電燈を求めて、太陽に向かわない。朝聞いて夕べに役立ち、今日得て、今日の用に供しようとする。であるがゆえに、恩給を受ける日に至れば、役者が衣裳を脱いだと同一の、人生に用のすんだ人となるのである。

自力の電燈を捨てて久遠の太陽に向かつて立つ心、すなわち他力本願の天地である。

お念仏に生きるものは、お念仏の尊き光と香を人生に残す。

信心は、智慧である。智慧は、如来心そのままの光である。衆生の心内にほのかに照らす光である。智慧は、我を遠離する。したがって智慧は無我の心である。

人生の一切の美しい華は、無我の心によつて咲くのである。無我の華に、尊い香りがあつて残るのである。

無我の智慧は一心である。永遠に相続する一心である。

一心は、開けば礼拝門となり、讃嘆門となり、やがて作願門となる。合掌礼拝の人の生きて行く世界に、尊い道が開け、一筋の歩みが残る。

一心が身業の上に開けて礼拝なれば、口業の上に現われては、讃嘆であり、意業において作願である。如来を讃嘆する人は、如来の徳を生きるものである。如来を讃嘆するものは、諸仏によつて、廣大勝解者と讃えられ、人中の白蓮華とよばれる。広大にして最勝なる了解者、すなわち真実の智慧者とよばれることである。泥中に咲く白蓮華をもつて象徴せられるのである。

われらはまことに、そのしかることを拝むものである。

徳を讃嘆する人は、徳の華の栽培者である。

悪逆は、悪逆を語って、人よりもまた悪逆の毒を引き出すものである。だれにも讃嘆せられざる人は、なにゆえにできたのであるか、答えは簡単である。だれをも讃嘆せざるがためである。

人の徳を拝むものは、必ずその徳を讃嘆する、讃嘆の心がすでに徳なるがゆえに、人によつて讃嘆せられるのである。

徳の讃嘆者のみ、人生に徳を残す人である。

深山幽谷に杉の大木が太つており、海辺の巖上に老松が立つておる。

お念仏の子もまたかくのごとくあれ。

自ら大法の水を吸わず、栄養を摂らず、人を動かし、人を救わんとして横に歩むことは、悲しき自力我慢の相にほかならない。

一人の男は、親を目覚めさすとて、家に居すわり戦術を使い、てこずらせて、親を法の席に引出さんとし、一人の男は、親が本気になつて聞かんからとて、朝夕の勤行を止めて、自らも礼拝せずことごとくに親に毒ついて親を苦しめ、一人の女は、少しばかり聞いた法が高慢の種となつて、親を尻目にかけて、その仰せにしたがわない。何という大いなる顛倒の妄見であろう。

自利なくして何の利他ぞや、自ら合掌して謙虚に一道を行歩せずして、だれをか動かさんとする。

大法によつて、我を打ち砕かれ、深山幽谷の杉のごとく、独り願往生の一道をたどるべし。「得たと思ふは得ざるなり。」かかる我慢邪見は、悪臭以外にその家に残さぬであろう。

3

一枚のはがき。

「合掌。五日の夕方無事に工場に帰りました。仕事は六日から致して居ります。思えばなごやかな平和な一週間でした。叱られたことも今では懐かしく想い起されて、皆様とお別れしていることが淋しく思われます。しかし、み親様の御名を称ふことに依り、同じ想いで過ぐすことが出来るのだと思うと何となく嬉しく仕事にも張りがあります。先生本当に有難うございました。これからは本当の忠義に生きるために真面目に聞かせて戴きます。徳山の会には公休を利用して一日位は聞かして頂きます。今から楽しみに待っています。先ずは端書にて失礼ながら無事帰着の御通知を兼ね、厚く御礼申し上げます。合掌頓首」

この一枚のはがきが私の手に入った時、涙なしにはいられなかつた。二日たつても、五日たつても、ついに一週間たつても、み親の前に下らなかつた頭を、ついに母親の前に下げ、母親もまたわが子の前に手をついてあやまられた時、全員泣いた。よく下げてくれた、真の日本の相はそこにある。日本国土には孝をもつてのみ化生し得るのだ。もしあの一瞬が君の三十年後だったら、もし英一君の一生に無かつたら………思うだけでも慄然とする。よかつたよかつた。一生を今の心で貫いてくれ。

有名にはならなくてもいい。春は桜の上に見えるのではない。有名にはならなくてもいい。真実の歩みを成就しよう。有名であるより真実であれ。

南無阿弥陀仏は、清淨真実なる彼岸のすべてである。功德大宝海と讃えられ、大心海、大智海、智願海、大悲海等々と釈せられるところの全一なる円融無碍の功德宝海である。

念仏の人は、濁悪不善の生死の此岸にいつつ、この廣大なる功德大宝海に帰入し廻心懺悔して生きる人である。

如来浄土の尊さは、この人の生活を通して、人生に実現せられるのである。されば、ただ、忠実に卑謙を本とし、法の尊信を至要として、自然に、法爾に、念仏道に不退転であるならば、あたかもこの人の身より発したる光のごとく、香のごとく、浄土の徳の尊高は、この人の足跡に残るであろう。

十方恒沙の諸仏も、三世の菩薩大士も、名号の功德大宝海を、その所信として、最勝道を成就せられることを憶う時、悪逆下下の凡夫として、至心に仰信すべきである。

人は衷心の願い、心の底より求め愛樂したものをこの世に残して去るのである。道を好む者は道を残し、徳を好む者は徳を残し、法を好む者は法を残す。ゆえに、聖者とは、法を好んで、法を生き、法を残してこの世を去る人である。

下下の凡夫も、大法を信樂すれば、正定聚の菩薩と讃えられ、如来と等しと名づけられる。

「一。同行同侶の目を恥ちて冥慮を恐れず、ただ冥見を恐ろしく存すべきことなり。」(『御一代記聞書』)

「二。前々往上人仰せられ候。仏法の上には毎事に付いて空恐ろしき事と存じ候ふべく候。ただ方に付いて油断あるまじき事と存じ候への由折々仰せられ候ふと云々。」(同上)

念仏の子は、ほのかにみ光に照らされて己を知る。己を知つていよいよ仏恩の廣大、四恩の尊さを知る。油断なく内に己を凝視しつつ、しかもありがたく撰取不捨の光懐に生かされる。己独り室にあるとも、山にあるとも、ついに独りではない。御冥見を恥じ、御冥加を喜びて、一道を歩む。

とにもかくにも今日一日、ご恩の中に気をつけて生きさせていただく。今日一日お念仏を申させていたどうか。ご恩になれ、我慢を出して、懈怠であることは、悲しい相済まぬことである。

「一。人はあがりあがりておちばを知らぬなり。ただ慎みて不断空恐ろしきことと毎事に付けて心を持つべきの由仰せられ候。」(同上)

こうした厳肅なご教訓を忘れて、憍慢邪見の出まかせで暮らしていれば、何が出てくるか、何が残るかわかつたものではない。

私は今日、何を残して歩んでいるか。永久に考えて見ねばならぬ問題である。

汝よ。大きなことをしようとしてはならない。大きなことよりも真実がいい。名利、貪欲に乗って走ってはならない。静かに静かに、いらぬこと、いらぬ言葉、そうしたことに時を費さず、教えを忠実に聞きつつ、一筋の道を歩ませていただくべきである。

国土に、家に、周囲の人の心に、何を残して今日一日を送るのか。